

元気のでる授業評価調査を - より新しい講義の開発を目指して -

ともすれば、授業を査定する印象のある授業評価調査。本来、評価とは現状を知り、新しく次の段階へ進むための手段でもあろう。今回、教育工学という比較的新しい学問の成果を生かした大学講義を实践し、学生との対話手段にもある授業アンケートを実施していて、多くの大学、学部で授業評価調査についての講演を重ねている三尾忠男さんにお話を伺いました。

- 現在の日本における授業評価

「授業評価」には基本的に賛成の立場ですが、今、全国の大学・短大で行われている授業評価について、もう少しまいり方があるのではないだろうかと考えています。「授業評価」や「大学評価」は、専門家がさまざまな専門の見地に軸足を置いて、授業の内容や大学教育のシステムがどのレベルにあるのかを判断するものだとして認識しています。日本で授業評価として行われている調査の多くは、学生から授業のわかりやすさや満足度などを訊くという受け手側のアンケート調査にすぎません。専門家が評価の判断材料として学生の理解度や満足度をチェックする必要はあると思いますが、たかが20数項目で「授業評価」と呼んでいいのでしょうか。そもそも学生にとって講義、しいては大学で学ぶ意味が、欧米におけるそれとは同じといえるのかということも考慮しないといけないでしょう。

さて、主に大学や学部が主導して実施される学生アンケート調査には、我々教員側からすると少なからず不安を感じてしまうのです。「授業」は教員だけでなく、学生や教室などいろいろな要素があるにもかかわらず、「教員」を批判する材料にされてしまうことです。調査はやってみたくれど何を書かれるか怖いという先生はたくさんいるのです。授業評価は、学生はもちろん教員にとってもプラスにならなければ意味がありません。授業への元気を引き出す授業評価であればいいですが、元気をなくすような授業評価はやらない方がいいとまで思います。さらに、学期末では受講している学生への調査結果について教員から直接、解説するチャンスがないですね。そのため、学生にとっても形骸化した調査になってしまうのです。重要なのはその評価を「授業」の質の向上のためにどう活用するかであるはずなのに、評価調査の実施に時間と経費がかかっていて、より最適な授業を目指すとは本来の段階に至っていないのが現状なのです。

- 授業改善は教員の自己改善の意識から

もちろん学生の声を訊くことは大切であると思います。私ば「授業意識調査」として、毎回の授業の終わりにマークシートと自由記述を併用した学生アンケートを行っています。授業の具体的な改良点を見つけるのはもちろんですが、使った教材や教授法がどんな効果があったのかを即日、知るためです。学生の感想や集計データには毎回、一喜一憂です。授業で感じたことや質問を毎週、学生と語り合うことは有意義で大きな満足感があります。学生にとっても、終了直前の数分間、今日の授業を振り返るという行為が復習にもなってその日の達成感につながるようです。

私自身のスタンスはどうかといえば、いろいろな大学での講演の際、教員一人一人にば「授業評価をやりましょう」と言い、一方では組織に対しては「やめましょう」と言っています。どうかすると矛盾ではないか!と、いつもひんしゅくを買ってしまうんですね(笑)。でもこれは少しもおかしくはない。なぜなら、授業の改善は人から言われてするものではなく、教員自ら行うものだと考えているからです。私自身アンケートは授業の自己改善の手段として行っています。教員が必要だと感じた時に行えばいいのではないかなとも思います。同僚からば「3年に一度で十分だろう」という意見も

聞きます。たとえば、「最近、学生の成績やレポートの質が変わってきたぞ。どうしてなのかな」と感じた時に授業評価を行えば授業が改善されていくじゃないですか。毎年決まりごととしてやっていたら教員・学生に刺激も少なくなり、形式化してしまう恐れもあります。実際、私が前職の時、組織的な授業評価調査を支援したある高等教育機関では年度末の報告書に同じことしか書けなくなっていました。

- 授業改善から授業開発という考え方へ

大学の授業改善に向けた試みにはまだまだ工夫や可能性の余地があり、いろいろな方法を試してみても自分の大学や学部、授業に合ったものを探るのが良いのではないかと思います。いろいろな手段を試してみても、目の前の現実に適したものを選択する方が良いですから。これは教育工学という見地からも言えることです。いろいろな材料を集めて、設計して、実践してみる。そうやってより良いモノを作り出していく。そして大切なのは、現状を改善したところで終わらせてしまうのではなく、日々見直し続けていくという姿勢です。

私は、「常に教育方法を見直していこう」という発想が教育工学であると理解しています。学会初期に書かれた文献に、「教育工学とは、教育者により適切な教育行為が選べるようにする学問である」という意見があります。これは、「より」適切な教育に向けて日々開発していこうというもので、常に最適なものを目指して努力することにはほかならない。ですから私ば「授業改善」というよりば「授業開発」という考え方で取り組んでいくべきではないかと感じています。もう一歩踏み込んで言えば、教育者ば適切な教育行為を選ぶ「能力を持たなくてはなりません。必然的に「教師教育」というものも浮かび上がってきます。学校教諭がこれまでの対象でしたが、授業をビデオで撮影し、自分の授業を映像で振り返ることは「教師教育」の手段として有効です。他に私自身、他に同じ専門領域の他学の教員と互いの講義を相互に参観する(ビデオ・レビュー)を始めて2年目ですが、授業について教員同士で語り合い情報交換をして外的刺激を受けていること、この二つの視点は本当に欠かすことができないとつくづく感じています。

我が国において大学教員の教育業績への関心が高まっています。私たち教員が自身の授業にさらに関心を高めることは当然ですが、教員の数だけその講義や授業も多様であってよいはずですが、1つの方法で単純に比較、評価することはその結果を受け止める体制ができていない今、ナンセンスかもしれません。いま世間では何事につけ評価をしよう、評価しなければいけないといった風潮があります。が、それは本質を見誤ったものではないでしょうか。派手ではないが地道な努力や成果を上げている授業を発掘することも評価の大切な機能でしょう。大学教育の役割について教員はもちろん学生も自問自答しながら、日々の授業について、まず教員と学生が互いを知り理解する手段、大学教育について同僚と語りあうきっかけとして授業のアンケート調査をとらえてはどうでしょうか。そう考えることができたなら、組織的に実施される授業アンケート調査も教員、学生にとって有意義なものになると思っています。

教育・総合科学学術院教授 三尾 忠男さん



【みお ただお】

1963年大阪生まれ。専門：教育方法学、教育工学。修士(教育学) 京都教育大学特修理学科卒業。鳴門教育大学大学院で教育工学を専攻。文部省大学共同利用機関放送教育開発センター(現在、メディア教育開発センター)助手、助教を経て2001年より現職。主な編著書に『FD(ファカルティ・ディベロップメント)が大学教育を変える』(共編・文芸社)、『教育メディア科学』(共著・オーム社出版局)など。